

令和6年度 本郷中学校
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点…一〇〇点)

注 意

- 一、問題の解答は解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 二、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 三、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 四、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含まれます。
- 五、用具の貸し借りは禁止します。
- 六、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 七、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 八、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【二】 次の①～⑤の――線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 新しいチームが台頭してきた。
- ② 彼とはあいさつをよくかわす仲だ。
- ③ 成長とともにニューシが生えてきた。
- ④ とてもイサギヨい決断だ。
- ⑤ 実力のある彼にシラハの矢が立った。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

臓器移植にまつわる状況そのものは何らかの形で「よりよいもの」になるに越したことはないし、実際そうした努力がなされているのであるが、それを理解するために、臓器移植独自の問題を見てゆこう。二一世紀現在、臓器移植にまつわる問題は世界的にも注目されている。なぜならそれは、豊かな人びとと貧しい人びととの間の格差問題や、国家を超えた公平性の問題という側面を持つからである。たとえば、アメリカでは臓器の^{注1}レシピエントとして登録されるためにはお金がかかるし、任意加入の^{注2}保険についても、臓器移植が適用外のものも少なくない。そうしたなか、貧困層の人は臓器不全を患^{わづら}ついても、なかなか臓器移植をしてもらえず、貧しい境遇に生まれたせいで他人よりもすぐに死にゆく人もいる。二〇〇二年に公開された映画『ジョンQ——最後の決断』（原題：John Q.）はそうした社会状況をフィクションとして映画化したものであり、富裕層と貧困層との間に横たわる健康格差、そして、生きのびる機会の不平等の問題が世に知られるところとなった。しかし、こうした問題は一国内だけにとどまるものではない。先進国の豊かな人たちが他国へ渡り、臓器移植を受けるための^{注3}医療ツーリズムも問題視されている。これは、病人やその家族といった当事者たちからすれば、「気持ちでそのチャンスに飛びついているわけだし、なかには「親が幼い我が子に臓器移植を受けさせるために財を投じて海を渡る」といった美談もある。もちろん、それは生命を救うという意味で倫理的ではあるのだが、¹どの立場からそれを眺めるかによって見え方が変わってくる。そして立場を変えれば、それは反倫理的な面が姿を見せているかもしれないのだ。海外への臓器移植目的の渡航とは、簡単にいってしまえば、或^ある国Aの国民が大金をもって別の国Bで臓器を買うようなものであり、臓器移植を求めるB国の人たちが並んでいる行列に、マネーをひっさげたA国の人が割り込むようなものである。もちろん、^{注4}だからといって「思いでB国まで出かけて一財を投じるA国出身の病人やそのサポーターが^{注5}間違っているとはいえない。つまり、誰も間違っていないのだが、より改善すべき方策があればそうするに越したことはない。では、どうしたほうがよいかといえば、それはA国において「^{注6}脳死後にドナーとして臓器を提供しませぬ」という意志を持った人が増えることである。

実は、このA国の立場には旧来の日本も含まれている。実際、多くの国において臓器提供者（ドナー）はそれを希望する人たちに對して不足気味であり、二〇〇八年の国際移植学会では「移植が必要な患者の命は自国で救える努力をすること」という主旨のイスタンブール宣言が出された。これは、海外渡航移植に頼っていた日本にも該当するハナシであり、臓器移植法の改正の背景ともいえるものである。日本ではそもそも一九九七年に臓器移植法が施行されたが、その時点においては、脳死後の臓器提供には本人の書面による意思表示が必須であった（その後、家族の承諾も必要であるが）。しかし、それではなかなか提供可能な臓器数が増えなかったこと、そして前述のイスタンブール宣言や、二〇一〇年のWHO（世界保健機関）の総会において、海外に渡航して臓器の提供を受けることを自粛するよう各国に求める新たな指針が承認されたこともあり、日本国内での臓器提供者数の確保はいまなおわれわれに突きつけられた課題ともいえる。こうした背景のもと、臓器移植のハードルを下げるような臓器移植法の改正が二〇〇九年に成立し、二〇一〇年七月に全面施行となった。改正後の臓器移植法では、①本人の意思が不明な場合でも家族の承諾があれば脳死状態の患者から臓器摘出が可能となり、②一五歳未満の脳死患者からの臓器摘出も可能となった（もちろん保護者の同意が不可欠であるが）。さらに、③運転免許証における意思表示の仕方にオプトアウト方式が導入されるなど、これらの改正によってより多くの臓器が国内で確保されることが今後見込まれる。しかし、こうしたやり方は国際的協調関係や功利主義という観点から正当化できても、「個人の生」という点で本当にそれでいいのかという懸念がつきまとう。

上記③のオプトアウト (opt-out) とは、オプトイン (opt-in) の対義語である。後者は或る選択肢を積極的に選ぶことで参加を表明するもので、それは明確な同意を表わすのに対し、前者は、或る選択肢を選ばないことを表明することで、そこから脱退する意志を表明するものである。よって、臓器移植におけるオプトアウトでは、「私は、臓器を提供しません」という選択肢に○をつけない限りは、「脳死後の臓器提供に反対の立場をとっていません」という意思表示をしていることになる。つまり、明確な（拒絶の）意思表示をしていなければ、それは推定上の同意とみなされるわけなので、脳死もしくは心臓停止後に臓器が摘出されることを妨げないのだ（もちろん、その後は書面による家族の承諾が必要とされるが）。しかし、そうした意志表示の方法へと変化させた理由は、もちろん「臓器提供に同意していること、になる人」を増やすためである。

注8
認知心理学には「デフォルト効果」というものがある。これは、最初に何をデフォルト（初期設定）とするかによって、人びとの選択がそれに左右されるというものである。通常、われわれは、注9
リスクがあるようかもしれないような状況や、明確な答えを持たない曖昧な状態において、積極的にそこへ飛び込もうとはしない。こうしたとき、「もし、この現状を否定し、別の選択肢を望む人は○をつけてください」といつても、なかなか○をつけることはできない。すると、初期設定である現状に同意していることになってしまう。さらにここでは、「移植に賛同しますか？」ではなく「移植に反対なのですか？」という質問フレームのもと人びとへ問いかけ、デフォルトに留まるよう誘導しているともいえる。これは「フレーミング効果」というもので、論理的にもしくは意味的に等しいものであっても、選択肢の表現の仕方や枠組みの違いが嗜好や選択へ影響を与えるというものである。

そう考えると、臓器移植法改正後に臓器提供者数が増えるであろうことも理解しやすくなる。デフォルトを「臓器提供に同意する」としたうえで、「〈提供しません〉に○をつければ〈臓器移植に同意しない〉ということになります。○をつけますか？」とすれば、そこでは人はどう判断するだろうか。そもそも、脳死が生きているかどうかは未解決問題であるし、脳死状態が延々と続くことへの不安や疑問、そして臓器移植の効用などを考慮した結果、唯一無二の解答を出せる人などはほとんどいないように思われる。そこに「〈臓器移植に同意しない〉ということになります。○をつけますか？」という問い方をすること、すなわち「拒絶しますか？」と問いかけるような拒絶フレームを用いることで、「よく分からない問題だしなあ。別に臓器移植に積極的に反対したり拒絶したいわけじゃないし……」となり、判断保留のまま、〈提供しません〉に○をつけることなく、結果、臓器移植に同意したことになる人が増え、国内での臓器移植手術の拡大が可能となり、しかも、誰の選択の自由も侵害していないのでメダシメダシ、ということになるわけである。実際、文化的に似通ったお隣同士の国でも、こうした方式による違いから同意率への極端な差が生じている（二〇〇三年の調査によれば、オーストリアは同意率が一〇〇%近いのに対し、隣国ドイツではわずか一二%にすぎないなど）。

これは、パターンリズム（父権的介入主義）のように、或る正しい（と思われる）選択を推奨しながらも、押しつけること

なくあくまで本人自身に選択の余地、すなわち本質的価値であるところの「自由」を保障しつつその選択を当人に委ねるとい
 点で、リバタリアン・パターナリズムと呼ばれるやり方である。自由を侵害することなく、しかし、人びとや社会を良い方向へ
 と導こうとすることで、人びとを自由な行為主体として尊重しながら、社会全体をより良い方向へ変えていこうとするもので、
 これは功利主義の洗練バージョンともいえるであろう。

しかし、こうしたやり方が「禁煙」や「過度な飲酒の制限」であればともかく、臓器提供のケースで人びとを「良い方向」へ
 導くとき、それは導かれるその個人にとって「良い」、ではなく、社会にとっての「良い」という印象を受ける。「脳死状態になっ
 たらもはや人格ではないのだから、他人のために臓器を摘出してもらい、それで他人を救う意思を示すよう導くことは善いの
 だ！」とリバタリアン・パターナリズムが主張したとしても、そもそも、「脳死のとき、自分は死んでいるのか」が分からない
 人も多いわけで、「もしかしたら生きているかもしれない自分から臓器が摘出されるとき、本当にそれは自分にとって善いのだ
 ろうか」という疑問を持っていて当然である。「死んでいるか生きているか分からない人から臓器を摘出することは善いのだろ
 うか……」という疑問や悩みを軽く扱い、「君にとつてはともかく、他人にとつては善いし、社会全体にとつても善いし、君は
 同意したくないわけじゃないんだからいいじゃないか」というのであれば、それは個人軽視の全体主義^{注10}でしかない。しかも、そ
 の責任は、自由に選べる形で「脳死後の移植に同意したことになる」という点で、個人に押しつけられるわけである。つまり、
 脳死状態になったとき、「この人は、拒絶の意思を示さなかったのだから、臓器摘出するのは構わないし、それはこの人の責任
 だね」とならざるをえないよう誘導されているのだが、⁵ 本当にその誘導の仕方が倫理的に正しいかは議論の余地があるだろう。

(中村隆文『「正しさ」の理由——「なぜそうすべきなのか？」を考えるための倫理学入門——』)

※問題作成の都合上、小見出しを省略したり、問題文の表記を一部改めたりした箇所があります。

- 注1 レシピエント……(臓器を)移植される者のこと。
- 注2 任意加入の保険……契約するかしないかが本人に任されている保険のこと。
- 注3 医療ツーリズム……外国に行き治療を受けること。
- 注4 だからとって……ここでは、「だからといって」のことだと思われる。
- 注5 サポーター……支援者のこと。
- 注6 脳死……脳の機能が停止すること。現代医療では治療のしようがなく、やがて心臓が停止する。
- 注7 功利主義……ここでは、できるだけ多くの人びとに最大の幸福をもたらすことが善であると考えられる立場のこと。
- 注8 認知心理学……知覚、記憶、思考などの人間の心の活動を情報処理の観点から研究する学問のこと。
- 注9 リスクがあるようかもしれないような状況……ここでは、「リスクがあるかもしれないような状況」のことだと思われる。
- 注10 全体主義……個人の自由や社会集団の自律性を認めず、個人の権利や利益を国家全体の利害と一致するように統制を行う思想または政治体制のこと。

問一 問題文中の二つの空らんには同じ言葉が入ります。その言葉として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 天にもものぼる イ 後ろ髪^{がみ}を引かれる ウ 藁^{わら}にもすがる エ 身の縮む

問二 ——線1「どの立場からそれを眺めるかによって見え方が変わってくる」とありますが、ここではどういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 海外で臓器移植するという患者にとっては生きるための倫理的な行為が、貧しいために渡航手術を受けられず、国内で臓器移植を待つ患者からすれば、国内の貧富の差の問題から目をそむけた独りよがりな行いに見えるということ。

イ 移植のための渡航という国外の富裕層にとっては生きるための当然の行いが、彼らを受け入れる国の移植希望者からすれば、自分たちに配分されるはずの臓器を横取りし、生きる可能性をせばめる非道德的ふるまいに見えるということ。

ウ 海外で移植手術を受けるといふ患者にとっては生きるための自然な行為が、彼らを受け入れる国の政府にとつては、海外渡航による臓器の提供を禁じるWHOの指針に反するため、解消すべきめんどろな問題に見えるということ。

エ 渡航して貧困層から臓器を移植するという富裕層にとつては生きるためにさけられない行為が、彼らを受け入れる国民からすれば、国家間の経済格差につけ込む許しがたい行いであり、政府が法改正により対応すべき課題に見えるということ。

問三 — 線2 「臓器移植法の改正」とありますが、その目的はどのようなものですか。適当な部分を問題文中から十八字で抜き出し、最初の五字で答えなさい。

問四 — 線3 「オプトアウト (opt-out)」とありますが、これはどのようなものですか。その事例として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ウェブ上で「この広告の表示を停止する」をクリックしないと、広告を配信しつづけることを了承していると判断されること。

イ 個人としては賛成していなくとも、多数決で決まったことを根拠として、文化祭のクラスの企画への参加を強制されること。

ウ 電話での商品の売り込みに、「要りません」ではなく「結構です」と返答したら、購入に同意したとみなされてしまうこと。

エ 契約者が未成年の場合、本人ではなく保護者のサインがあれば、本人とのアパートの賃貸契約が成立したと考えられてしまうこと。

問五 — 線4 「臓器移植に同意したことになる」とありますが、なぜ「同意したことになる」のですか。八十字以内で説明しなさい。ただし、「デフォルト」と「拒絶フレーム」という言葉を用いること。

問六

——線5「本当にその誘導の仕方が倫理的に正しいかは議論の余地があるだろう」とありますが、なぜ筆者はそう考えるのですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 臓器提供希望者数の増加という社会全体の利益のために、個人の選択権を一部制限することは、個人の自由を最大限尊重することを目的としたリハビリアン・パターンリズムに反しているから。

イ 脳死と判定された場合、身体の外置にかかわる疑問や悩みを無視したまま、一律に臓器の摘出を強要してしまうことには、個人の尊厳よりも社会全体の利益を優先する危うさがあるから。

ウ 脳死状態になったら臓器の摘出を認めるように個人の選択を誘導するオプトアウト方式が導入されたが、脳死状態が人の死か否かに関する倫理的な議論がまだ十分になされてはいないから。

エ 臓器移植に関して一見個人の自由な選択権を認めているようだが、実際は個人に責任を負わせつつ社会の利益に沿うような選択をさせているため、個人の自由を侵害しているおそれがあるから。

問七

次に示すのは、この問題文を読んだ四人の生徒が、――線「メダシメダシ」を話題にしている場面です。問題文の言おうとしていることに最も近い発言を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

教師――「メダシメダシ」という表現の特徴について、気づいたことや考えたことを話し合ってください。

ア 生徒A――「メダシメダシ」がカタカナ表記になっていますね。そうすることで、この表現に読者の注意を向けているのでしょうか。この状況が、誰の選択の自由も侵していないよい決着だ、と筆者は訴えているのだと思います。

イ 生徒B――「メダシメダシ」という表現は、「メダシ」が繰り返されている点が重要です。国内での臓器移植手術の拡大が可能となったことと、誰の選択の自由も侵していないことが、共によい決着だということ。「メダシ」を重ねることで表現しているのでしょうか。

ウ 生徒C――なるほど。誰の選択の自由も侵害せず国内の臓器移植手術が拡大したことに注目すべきという点には賛成です。ただ、このカタカナ表記は、表面上はよい決着のように見えるけど、実際はそうではないと考える筆者の批判意識のあらわれではないでしょうか。

エ 生徒D――いやいや。そうではなく、文章に軽快さを出すためだと思います。「目^{めでた}出度^{めでた}し」よりも「メダシメダシ」の方が読者に軽やかな印象を与えることができます。文章にリズムが生まれ、テンポよく読むことができます。

【三】 次の文章は、如月かずさの小説『給食アンサンブル2』の一節です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

中間テストが終わっても、牧田たちが部活にもどってくる気配はなかった。

公民館の文化祭はもう来週末に迫っている。練習開始前の音楽室で、おれが [A] していると、顧問の吉野先生がひさびさに部活に顔を見せた。ところが音楽室の中には入ってこようとはせずに、廊下からおれのことを手招きしてくる。

おれが廊下に出ると、吉野先生は声をひそめて話しかけてきた。

「練習前に邪魔しちゃってごめんね。三熊くん^{みくま}に教えてもらったんだけど、金管パートの牧田さんと、それから一年生の子も何人か、最近ずっと部活に出てきてないんだって？」

思ったとおり牧田たちの話だった。すぐに解決するつもりだったから、吉野先生にはまだ報告はしていなかった。それなのに余計なことをと、おれは胸の中で三熊を非難した。

「それでね、わたし、牧田さんたちに話を聞いてみたんだけど……」

「牧田はまだ、おれが部長を辞めないかぎり部活にはもどらないといってるんですか？」

長々その話をしたくなくて尋ねると、吉野先生は虚をつかれたような顔でぎこちなくうなずいた。しかしすぐに明るい表情になつて続ける。

「けどね、そのことについて牧田さんたちとよく話しあってね、部長の信任投票をすることにしたらどうかって提案してみたの。そうしたら、牧田さんたちもその条件ならまた部活にきてもいいっていつてくれてね」

「信任投票？」

要はおれが部長を続けていいか、部員による投票で決めようということだ。吉野先生は「名案でしょう？」とでもいいかげん顔をしている。おれはその顔を冷ややかに見つめかえした。

「信任投票をして、おれが部長を続けられると思ってるんですか？」

吉野先生が「えっ？」とつぶやいて笑顔を消した。そして B と言葉を取り繕う。

「わたしは、高城くんは吹奏楽部のために頑張ってくれているから、みんなも高城くんを支持してくれると信じてるけど、もし、もしもね、投票の結果が残念なことになっちゃったら、そのときは副部長の三熊くんとかに部長を譲るしかないんじゃないかな。だって牧田さんたちがもどってきてくれないと、金管パートは練習もできないんでしょ？」

おれは失望が顔に表れないように努めた。吉野先生はおれのことをわかってきている。味方でいてくれる。そう考えていたのは、どうやら間違っていたようだ。

この状況で信任投票を拒絶することはできないだろう。そうなればおれは確実に部長を辞めることになる。吹奏楽部を変えることはできなくなる。

おれは廊下から音楽室の中を見わたした。おれと目が合った一年の部員が、おびえたように視線をそらした。

もっと早いうちに見切りをつけるべきだったのかもしれない。ここにはおれの味方なんてひとりもない。そんな場所でおれひとりがいくら頑張ったところで、あのおれが感動したような演奏をできるようになるわけがない。どうしていままでそれに気づかなかつたんだろう。

「失礼します」

おれは吉野先生に会釈をして音楽室の中にもどった。そして乱暴に荷物をまとめて帰ろうとすると、そこで三熊がおれのことを止めた。

「高城、どこに行くのさ」

「部長はおまえがやればいいだろう」

三熊の顔を見ずにそれだけ言葉をしぼりだすと、おれは大腿で音楽室を出た。吉野先生が慌ててなにかいったのが聞こえただけ、返事をせずに立ち去った。

おれのことを追いかけてくるやつはひとりとしていなかった。

(中略)

翌朝、おれはトランプを持って登校した。怒りといらだちはおさまるところか、時間がたつにつれてますます強く激しくなっていた。

教室につくとすぐに、大久保おおくぼが話しかけてきた。

「部長、昨日は、あのさ……」

おれはじろりと大久保の顔をにらみつけた。大久保がはっとしたように言葉を止める。

その反応に満足してカバンの中身を机に移しはじめると、すぐに「そういう態度つてないと思う！」と怒った声が投げつけられた。声の主は大久保とおなじ打楽器パートの小宮山こみやまだった。いつもおとなしいやつだから、そんな声も出せるのかとすこし驚いた。

「大久保くんは、高城くんのことを心配してたんだから。それに、わたしも……」

おれはふん、と鼻で笑った。心配していたなんてどうせ口だけだ。信用できるわけがない。ほんとうはおれがいなくなっせてせいせいしていたんじゃないのか？

大久保と小宮山はおれと話すのをあきらめて自分の席にもどった。まもなく三熊も教室に入ってきたが、おれが無視して教科書をにらんでいると、なにもいわずに自分の席すわに座った。

午前の授業が終わり、おれは給食当番の仕事で給食を取りにいった。給食室で目についた保温食缶を持ちあげ、大股で教室に帰る。

おれのいらだちは限界を越えそうになっていた。なんでもいいから思いきり殴りつけて壊こわしてしまいたい。そんな凶暴な衝動しゅうどうをこらえながら保温食缶を運んでいると、となりのクラスの牧田の姿が目に入った。

牧田は給食の配膳はいぜんが始まるのを待ちながら、おなじ班のやつと笑顔で話していた。憎悪ぞうおをこめた眼差しで牧田をにらみつけながら、おれがとりの教室の前を通りすぎた、そのときだった。廊下ろうかが急に滑すべって、おれは前のめりに倒たおれてしまった。

廊下に落ちた保温食缶みなまわが耳障りな音を立てた。落ちたはずみで蓋ふたがはずれ、中身のクリームシチューが大量に床に広がる。その惨状さんじょうを呆然ぼうぜんと見つめ、それから足もとに視線を移すと、だれかの落としたプリントがひらひらと揺れていた。

「くそっ！」

おれは について保温食缶を殴りつけた。殴った拳がひどく痛んで顔をしかめる。けれど怒りはまったくおさまらなかつた。もつと何度も殴りつけてやりたかつた。

雑巾ぞうきんを手に駆かけつけたクラスメイトに、おれは「触さわるな！」と声を荒あげた。そしておびえて動きを止めた相手から雑巾ぞうきんを奪うばい取り、押し殺した声で告げる。

「おれのミスだ。おれひとりで片づける」

廊下ろうかにこぼれたクリームシチューを、おれは乱暴にぬぐいはじめた。手伝いに出てきた連中が、ひとりまたひとりと教室に帰っていった。

ほかのクラスの給食当番が、大きくおれのまわりを避さけて通りすぎていった。廊下にはいつくばって掃除そうじを続けていると、おれはひどくみじめな気分になった。くそ、どうしてこんなことになるんだ。どいつもこいつもどうしておれの邪魔ばかりするんだ。おれの邪魔をするな！

おれは再び「くそっ！」と怒鳴どなって、力いっぱい廊下をこすった。そのときふいに現れたべつの手が、こぼれたクリームシチューを雑巾でぬぐい出した。はっとして顔を上げると、そこにいたのは三熊さんくまだった。

「手を出すなっっていつてるだろ」

「出すよ。ひとりじゃ時間かかっちゃうでしょ。それに、吹奏楽部の仲間なんだからさ」

気まずそうな笑顔でそういわれて、おれは言葉をなくしてしまった。おれがぼかんとその顔を見つめると、三熊が教室の

ほうを振りかえっていった。

「慎吾、この保温食缶、教室に持って行って配りはじめてくれる？」

教室から顔を出してこちらの様子をうかがっていた大久保が、「わかった！」とこたえて保温食缶を取りにきた。大久保はおれをほげますように笑いかけて、保温食缶を運んでいく。

おれが手を止めているあいだも、三熊はせつせと掃除を続けていた。そんな三熊の姿をながめているうちに、おれは無意識につぶやいていた。

「……どうしておれは、おまえみたいになれないんだろうな」

²三熊が驚いた顔でこつちを見た。おれも思いがけない自分の言葉にうろたえていた。

けれどその言葉は、嘘偽りのないおれの本心なのかもしれない。おれが三熊のように親切でやさしく、協調性のある人間だったら、いまみたいに部長の責務を放りだして、吹奏楽部を去るようなことにはなっていないかった。きつと理想的な部長として仲間たちに慕われ、目標に向かっていっしょに頑張ることができていた。

木管パートの練習風景を見て、妙に胸がざわついたのは、³三熊のことがうらやましかったせいなのかもしれない。三熊のようにはなれないことがくやしかったのかもしれない。

ひそかにうらやんでいたことが恥ずかしくて、おれが廊下を見つめたまましていると、三熊が静かに口を開いた。

「ぼくだって、高城みたいにはなれないよ。ぼくには実力も、みんなを引っ張っていく力もないし。それに高城みたいに強くないから、だれかとぶつかったりするのは苦手なんだ。だから高城の味方をしたくても、みんなに反発されるってわかってると、なかなか勇気が出せなくて、そのせいで高城につらい思いをさせちゃってごめん」

「おれの味方なんて無理にすることないだろ。おまえはおれの方針に反対なんだから」

視線をそらしてこたえると、すぐに三熊が「そうじゃないよ！」と叫びかえしてきた。

「たしかに、高城はいつきに部の改革を進めようとするから、それには反対したけど、ぼくも吹奏楽部の空気を変えて、もう

ちよつと真面目に練習がしたいとは思ってたんだ。夏のコンクールの結果もくやしかったし、単純にもつといい演奏ができるようになりたいから。ほかのみんなの反応が心配で、高城に協力するどころか、邪魔ばかりしちゃってたけど……」

「おまえが、おれとおなじ気持ちだったっていうのか？」

耳を疑っているおれに、三熊が C とうなずいてみせた。そしてまっすぐおれを見つめて言葉を続ける。

「すこしずつ、変えていこうよ。すぐには無理だと思うけど、これからはぼくもちゃんと協力するから」

三熊の眼差しから、強い意志が伝わってくるのを感じた。今朝、小宮山に言葉をかけられたときのように、鼻で笑うことはできなかつた。目頭が急に熱くなって、おれはゆがんだ顔を三熊に見られないようにうつむいた。

三熊が「これでもう平気かな」といって立ちあがった。途中からほとんど三熊ひとりに掃除をさせてしまっていた。三熊のあとについて教室にもどる途中、おれはその大きな背中に、「三熊」と声をかけた。

「悪かった。ありがとう」

三熊が目を丸くして振りかえり、おおらかな笑顔を見せた。

教室にもどると、おれの席にはすでに給食が運んであった。量が減ったのはおれのせいだから、責任を取ってクリームシチューは遠慮するつもりだったのに、その器もしっかりトレイに載^のっていた。器に入っているクリームシチューの量は、^{ふだん}普段の半分もなかつた。

食事が始まったあと、おれはそのクリームシチューを食べながら、^{注1}小学校時代のことを思いだしていた。いやがらせでほんのわずかしかよそつてもらえなかつたクリームシチューは、怒りで味がわからなかつた。けれどきょうのクリームシチューの味は、いつもよりやけにあまく、そして温かく感じられた。

給食の器から顔を上げると、となりの班の三熊と目が合った。すこしずつ、変えていこうよ。三熊の声が頭の中で響^{ひび}いた。

おそらくおれが部長を続けることはできないだろう。それでも三熊と協力して、すこしずつ頑張ってみよう。あのときおれが感動したような素晴らしい演奏を、吹奏楽部のみんなといっしょにできるように。

はにかむ三熊にぎこちなく笑^えみをかえして、おれは残りわずかなクリームシチューを大切に味^{あじ}わった。

放課後の音楽室には、ひさしぶりに吹奏楽部の部員が全員そろっていた。牧田たちもきているのは、吉野先生が提案した部長の信任投票がこれから行われるからだ。

「それじゃあ、いま配ったメモ用紙に、高城が部長を続けてもいいなら○を、そうじゃないなら×を書いてこの箱に入れてください。なまえは書かなくていいから。高城はなにかつけくわえたいことある？」

三熊に尋ねられて、首を横に振ろうとしたところで、おれは浅見^{あさみ}との会話を思いだした。もしも無駄だったら、あとで文句のひとつもいってやろう。おれはそう決めると、思いきって口を開いた。

「おれは、小六のときに聴いた高校の吹奏楽部のコンサートがきっかけで、吹奏楽をやりたいと思うようになった。そのとき聴いた演奏はほんとうに素晴らしくて、心の底から感動して、おれも中学に入ったら、吹奏楽部でこんな演奏がしたいって、ずっとそう考えていた」

いきなり話しはじめたおれに、部員たちはぼかんとしていた。こんなことを明かしても、やっぱり意味なんてないんじゃないか。そう疑いながらも、おれはさらに話を続けた。

「だけど、うちの吹奏楽部は練習熱心じゃなくて、去年のアンサンブルコンテストでも夏のコンクールでも、満足な演奏ができなくてくやしかった。だからなんとかしてみんなの意識を変えて、もっと真剣に練習に取り組めるように、この部を改革したかったんだ。そのせいでなごやかだった部活の空気を壊してしまって、迷惑をかけてすまなかった」

これまでおれは、部内に味方はひとりもないと思っていた。けれど三熊は、おれとおなじ思いを抱いてくれていた。もしほかにもそういうやつがいるのなら、そいつにはおれがどうして改革を進めようとしたのか、その理由をわかしてもらいたかった。

話を終えたとき、部員の大半はまだ戸惑ったままだった。おれが恥^{はづ}れずかしくなって顔を背けると、三熊のうれしそうな声が聞こえた。

「そんな話、初耳だよ。もつと早く教えてくれたらよかったのに」

三熊のほうを見ないまま、おれは「すまん」と短くこたえた。すると三熊が「ぼくもちよつといいかな」と部員たちに向かって手を挙げて、緊張^{きんちやう}気味に話した。

「これまでいいだせなかったけど、ほんとうはぼくも、もうちよつとしつかり練習をしたいなって思ってたんだ。いまのたのしいふんいきも好きなんだけど、もつとたくさん練習をして、いい演奏がしたいな、つて。だから、ぼくはまだ、高城に部長を続けてほしいと思ってます」

思いがけない三熊の言葉におれは驚いていた。まわりとぶつかるのは苦手だといっていたのに、反感を買うのがわかっていながら、おれを支持することを表明してくれるなんて。照れくさそうな顔でこちらを向いた三熊に、おれは心の中で感謝した。

部員たちによる投票が始まった。数分後には部長でなくなっている可能性が高いのに、おれは不思議と落ちついていて、結果がどうなるうと、おれがすべきことは変わらない。

⁵ 新たな決意を胸に、おれは投票が終わるのを待った。

※問題作成の都合上、文章を一部省略しています。また、一部表記をあらためたところがあります。

注1 小学校時代のこと……当時児童会長をしていた高城は、児童会の仕事をしない副会長の女子児童を注意したが、そのことに腹を立てた女子児童が高城の悪口を言いふらしたことにより、クラスメイトからいやがらせを受けていた時期があった。

注2 浅見……高城のクラスメイト。部活の悩みを相談してアドバイスをもらったことがあった。

問一

A C にあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。
なお、同じ記号は一度しか使えません。

- ア のそのそ イ わいわい ウ おろおろ エ むざむざ オ じりじり
カ おずおず キ そわそわ ク じわじわ

問二

にあてはまる言葉を、次の(語群)の中の漢字を組み合わせ、二字で答えなさい。

(語群) 様・態・失・気・乱・狂・心・悪・子・憎

問三

——線1「吉野先生はくぎこちなくうなずいた」とありますが、このときの吉野先生の心境を説明したものとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 吹奏楽部の顧問であるのに普段から部活動に顔を出していないため、そもそも部長の高城に会うのが気まずい上に、高城のせいで部活動にやってこない牧田たちの話をしないといけないので気後れしている。
- イ 牧田たちを吹奏楽部に戻すために提案して了解を得た「部長の信任投票」について、これから高城に話さなければならぬが、余計なことをすると高城に非難されそうで、話すことにためらいを感じている。
- ウ 部活に來ていない牧田たちから直接聞いてきた話について、自分が説明する前に高城がその内容を言い当てたことを思いがけなく感じるとともに、高城の言ったとおりだと認めづらいため、ばつが悪くなっている。
- エ 自分の話を途中でさえぎり話しかけてきた高城の態度に対して驚きを感じるとともに、高城がショックを受けないうようにしようとせっかくな遠回しに伝えていたのに、その意味も無くなってしまうようになっていく。

問四

——線2「三熊が驚いた顔でうろたえていた」とありますが、このときの三熊と高城について説明したものととして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 三熊は、真面目に練習したいという高城の考えに協力している自分の本心に高城が気づき、副部長として認めてくれていたことを知り、ありがたく感じている。高城は、優柔不断なところはあつものの周りに気がつかえる三熊のことを副部長として認めてはいたが、その胸に秘めていた思いをクラスメイトが周りにいる中でつい口にしてしまったため、弱音をはいたと思われるのではないかと感じ、恥ずかしくなつていゝ。

イ 三熊は、部員がうち解け仲良くなることを優先して吹奏楽部の改革に協力してこなかつたことに、高城が怒つていゝと思つていたが、実は高城から評価されていゝと知り、驚いていゝ。高城は、真剣に練習することよりも仲良く楽しく練習することに重きを置く三熊の考えは間違つていゝと思つていたのに、実は三熊の考えが正しかつたと認めるよゝな発言をしてしまつた自分に驚き、困惑していゝ。

ウ 三熊は、クリームシチューを片付けながら怒られるのではないかと内心ひやひやしていたが、高城から怒られるどころか自分のことを認める発言をされ、うれしくなつていゝ。高城は、自分がこぼしたクリームシチューを部員に声をかけながら勝手に片付けていゝ三熊をいまましく思ふ一方で、不意に三熊のやさしさや協調性を認める発言をしてしまゝ、あわてふためいていゝ。

エ 三熊は、演奏の実力もあり自分にない強さを持つていゝ一目置いていゝ高城が弱音をもらしたただけでなく、その高城から自分のよゝになりたゝと言われたことに驚きを感じていゝ。高城は、副部長なのに周りのことを気にして何もしてくれない三熊に対して不満に思つていゝはずなのに、実は自分にはない優しさや協調性を持つ三熊をうらやましく思つていゝことに気づき、驚きとまどつていゝ。

問五 — 線3「三熊のことがくかもしれない」とありますが、高城が三熊の本当の思いを知ったうえで三熊のことを頼もしく思っていることが感じられる表現があります。その部分を問題文中から五字で抜き出し、答えなさい。

問六 — 線4「おれは残りわずかなく大切に味わった」とありますが、このときの高城について説明したものととして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 吹奏楽部の件もあり、自分の不注意で給食のクリームシチューをこぼしてしまった失敗を素直に認めることができず、片付けを手伝おうとしたクラスメイトの厚意を踏みにじってしまったが、三熊がうまく取りなしてくれたことにより大きな問題にならずに済んでほっとするとともに、三熊に感謝している。

イ 自分の怒りが一因となりクリームシチューをこぼした上、片付けを手伝おうとしたクラスメイトに当たり散らしてしまったにもかかわらず、自分のことを気づかってくれた三熊のやさしさをうれしく思うとともに、自分の思いに賛同してくれる同志の存在に気づき、そのありがたさをかみしめている。

ウ 吹奏楽部の改革に協力的ではなかった三熊に対していらだちを感じていたため、自分がこぼしたクリームシチューを片付けようとした三熊に対してはじめは反発してしまっただが、後になって素直に謝ることができ、また感謝の気持ちも伝えられたため、今後は三熊と仲良くやれそうだと有頂天になっている。

エ いやがらせをされた小学校のときは違って、今回は自分に非があるにもかかわらず、クラスメイトが片付けを手伝おうとしてくれたり、三熊や大久保が率先して片付けを手伝ってくれたりした上に、クリームシチューまでよそっておいてくれたので、友達の大切さをあらためて実感している。

問七

——線5「新たな決意を胸に、おれは投票が終わるのを待った」とありますが、ここに至るまで高城の気持ちはどのように変化したと考えられますか。「新たな決意」に至るまでの過程とその内容を明らかにしながら、八十字以上百字以内で説明しなさい。

問題はこのページで終了です。

